

# 京都大学における フランス語教育の変遷と課題

—1949年から21世紀にいたるまで—

西山 教行\*

## 要 旨

本稿は新制京都大学におけるフランス語教育の実践を1949年から21世紀にいたるまでをたどり、その変遷の意義を解明する。フランス語教員は新制京都大学の開学まもなく独自教材の作成に取り組み、これは『初等フランス語教本文法編』を経て現在に到るまで継続的に行われている。旧制高等学校の教育文化を継承したこの教材と平行して、1960年代からはLL教室でオーディオリンガル教授法に基づく実践的なフランス語教育が行われており、これは1990年代のCALLフランス語文法の開発に結びついている。

【キーワード】 フランス語教育、教科書、カリキュラム、教育史、新制京都大学

## はじめに

本稿は新制京都大学のフランス語教育の歴史をたどり、その特色の解明を目指す。はじめに新制京都大学の前身となる第三高等学校におけるフランス語教育の概要を検討した後に、新制京都大学の開学から教養部の設置にいたるまで、ついで教養部の時代ならびに教養部以降の動向を経時的に検証する<sup>1</sup>。

## 1. 旧制第三高等学校におけるフランス語教育

新制京都大学は旧制京都帝国大学と旧制第三高等学校を統合して設立されたが、旧制高等学校から新制大学への接続の経緯は必ずしも単純ではない（京都大学1998）。昭和20（1945）年の敗戦後、学校教育は9月に再開されるが、昭和21（1946）年にはそれまで2年間に短縮されていた旧制高等学校の年限が3年間に戻され、昭和23（1948）年に最後の入学試験を実施するものの、旧制高等学校はGHQの方針で解体となり、昭和25（1950）年3月31日に廃止となる。この間の第三高等学校でのフランス語教育は教授・伊吹武彦（1901–82）、講師・生島遼一（1904–91）、本城格（1916–91）、Jean-Pierre Hauchecorne（生没年不明）の4名により実施されていた（第三高等学校1927～1941）。

\* 京都大学国際高等教育院

新制京都大学は昭和24(1949)年に開校すると、第三高等学校の教員の半数がまず京都大学分校に配置換えとなり、その中にはフランス語担当の伊吹もいた。翌年には生島と本城も分校教官として新制京都大学に配置換えになる。旧制高等学校教官が新制大学に配置換えとなり、ただちに教育に従事したことは、制度上は異なるふたつの教育組織において教官が教育観を大幅に変えることなく、同じような価値観のもとに教育実践を行っていたことを推測させる。この意味で、新制大学の創立期に行われたフランス語教育の検討には旧制高等学校の教育制度の参照が不可欠となる。しかしながら、ここでは紙幅の都合から新制大学との接続に関わる時期のみを取り上げ、第三高等学校におけるフランス語教育の全体像については別の機会に論じたい。

旧制高等学校には、英語を第一外国語とし、ドイツ語あるいはフランス語を第二外国語とするクラス(甲)、ドイツ語を第一外国語とし英語を第二外国語とするクラス(乙)、フランス語を第一外国語として英語を第二外国語とするクラス(丙)の3種があり、これが文科系、理科系それぞれに設置されていた。とはいえ、英語を第一外国語とするクラスではフランス語を選択することがおおかたの旧制高等学校において事実上拒否されていた(杉山1934, p.12)。また、第三高等学校の理系でフランス語を第一外国語とするクラスは開設されていなかった。このクラスが開設されていたのは、全国でも東京高等学校と大阪高等学校だけであった(旧制高等学校資料保存会編1985、田中貞夫2005)。

旧制高等学校の教育は外国語教育を重視しており、カリキュラムを見ると週におよそ33時間の授業時間のうち三分の一以上が外国語教育にあてられている<sup>2</sup>。ドイツ語かフランス語を第二外国語として学ぶ場合は週に4時間、第一外国語として学ぶ場合は週10～11時間がドイツ語かフランス語の学習にあてられていた。

フランス語を第一外国語として選択する生徒のおおかたは旧制帝国大学の法学部に(1919年以降は経済学部へも)進学し、30名から40名ほどのクラスのうち文学部に進学するのは一割にも満たなかった。大学教育が外国語の高度な能力を必要とするとの教育観は明治以降の日本の近代高等教育の設立に深く関わる(久保田1976)。日本の近代高等教育は明治初期において外国語によって外国人教師が教授することに始まるもので、学生には外国語による講義を受講し、参考文献を解説するための外国語の高度な能力が要求された。日本人教師が導入されるようになってからも、しばらくはヨーロッパの学術を日本語で講義することが不可能であったため、日本人教師も外国語によ

表1 旧制第三高等学校における外国語カリキュラム

( )は週あたりの時間

		1年(甲)	2年(甲)	3年(甲)	1年(乙・丙)	2年(乙・丙)	3年(乙・丙)
文科系	第1外国語	英語(9)	英語(8)	英語(8)	ドイツ語/ フランス語 (11)	ドイツ語/ フランス語 (11)	ドイツ語/ フランス語 (11)
	第2外国語	ドイツ語/ フランス語 (4)	ドイツ語/ フランス語 (4)	ドイツ語/ フランス語 (4)	英語(3)	英語(3)	英語(3)
理科系	第1外国語	英語(8)	英語(6)	英語(6)	ドイツ語(10)	ドイツ語(9)	ドイツ語(9)
	第2外国語	ドイツ語/ フランス語 (4)	ドイツ語/ フランス語 (4)	ドイツ語/ フランス語 (4)	英語(3)	英語(3)	英語(3)

(『第三高等学校一覧』をもとに筆者が作成)

る講義を行っていた。その後、次第にヨーロッパの専門書が翻訳され、日本語による学習が可能になってくるものの、専門の術語は外国語で語られることが多かった。そのため大学の講義を受講し、それを理解するためには高度な外国語能力が必要であった。旧制高等学校の教育は大学教育を準備するため旧制帝国大学の予科と位置づけられ、大学教育は本科と考えられた。旧制高等学校が法的に予備教育と位置づけられるのは明治27年に発布された「高等学校令」によるもので、これによりそれまでの高等中学校は解消し高等学校となり、旧制帝国大学に進学する3年間の予科が設置された。文部官僚で教育者の澤柳政太郎（1865-1927）は旧制高等学校を「大学入学者のための特別の準備をなす所」（澤柳1924）と明確に位置づけている。

このような社会的文脈のなかで高等学校はどのようなフランス語教育を行っていたのだろうか。『旧制高等学校全書』は東京高等学校（現在の東京大学教養学部）と福岡高等学校（九州大学）の教材を部分的ながらも紹介している。

ここで福岡高等学校と東京高等学校のいくつかのクラスで1年目に『佛語初歩』を使用していることに注目したい。この教材は、暁星学校が旧制暁星中学校でフランス語を第一外国語として学ぶ生徒のために編集し、1896年に初版が刊行された。フランス語教材がまだ数少ない時代にあって、第一外国語としてのフランス語の体系的な学習ができるよう編集されており、初級文法に次いで、中級と上級も刊行された（中村2015）。『佛語初歩』は初級文法の説明の後に、比較的やさしい選文集を含み、全体で400ページを超える大部となっており、1940年代まで改訂を重ねて使用されていた。これはフランス語を第一外国語として学習するには十分な分量だが、第二外国語の授業に使用するには明らかに分量が多すぎる。東京高等学校の文1甲（フランス語を第二外国語とするクラス）のクラスでは内藤濯『基本仏蘭西語文典教科書』を使用しており、これは70ページ程度

表2 フランス語初級クラスの教材一覧

校名	年度	クラス	教材
福岡高等学校	大正14年	文1丙	暁星学校編『初級佛語読本』 H. Malot, <i>Capi et sa troupe : épisode extrait de "Sans famille"</i> 暁星学校編『佛語初歩』 ラ・スムーズ編集部編『基本仏蘭西語文典教科書』白水社
	昭和16年	文1丙	暁星学校編『佛語初歩』 田島清編『仏蘭西語動詞変化ノ栞（改訂版）』白水社 吉松駿二編『新編現代仏蘭西語読本』三才社
東京高等学校	昭和2年	文1甲	ラ・スムーズ編集部編『基本仏蘭西語文典教科書』白水社 暁星学校編『中級佛語』
		文1丙	丸山順太郎『佛語初歩読本』 秋田玄務『佛語読本』 『動詞変化表』 内藤濯『基本仏蘭西語文典教科書』白水社
	昭和13年	文1丙	高木直明『初等フランス語文典』 <i>Grammaire et lecture de langue française</i> 白水社 暁星学校編『中級佛語』 内藤濯『基本仏蘭西語文典教科書』白水社
		理1丙	田島清 <i>Nouveau cours de français</i> 白水社 山本直文 <i>Nouveau livre de lectures française (cours élémentaire)</i> 白水社 暁星学校編『佛語初歩』

（『旧制高等学校全書』とともに筆者が作成）

のため第二外国語の授業にも妥当であったと考えられる。第三高等学校の教材に関わる史料は現時点では不明であるものの、東京高等学校や福岡高等学校の事例を見れば、フランス語を第一外国語とするクラスの教材として『佛語初歩』が、第二外国語のクラスが開講されていた場合、『基本仏蘭西文典教科書』が最も有力な教材と考えられる。

第三高等学校で第一外国語としてのフランス語履修者の多くは法学部や経済学部へ進学する生徒で、文学部への進学者はごく少数だったが、初級文法の修了以降の2年生では社会科学に関わる教材が使用されていたのだろうか。『旧制高等学校全書』にもとづき、東京高等学校と福岡高等学校の教材を検討したい。

これらの教材を見ると、社会科学に関する教材が比較的少数であり(E. Delacourtie, L. Delacourtie, *Droit usuel : introduction, droit public, droit civil*, G. Le Bon, *Choix d'essais* など)、教材のおおか

表3 フランス語中級クラスの教材一覧

校名	年度	クラス	教材	
福岡高等学校	大正14年	文2丙	内藤『佛文典』續キ L. Halévy, <i>L'Abbé Constantin</i> E. Delacourtie, L. Delacourtie, <i>Droit usuel : introduction, droit public, droit civil</i> <i>Contes de Maupassant</i> R. Bazin, <i>La closerie de Champdolent</i>	
			文3丙	É. Souvestre, <i>Un philosophe sous les toits : journal d'un homme heureux, Morceaux choisis d'Anatole France</i> ドオデ 内藤濯編『プチ・ショーズ』白水社
		昭和16年	文2丙	永井順編 E. Lapointe, <i>La France</i> 大観堂 モオバッサン 河盛好蔵編『旅にて』(第2版) 白水社 エミール・ヘック編『上級佛語学』
			文3丙	ゲーティエ 永井順編『仏蘭西精神』白水社 ラ・スムーズ編『ダヴネル論文式編』白水社
東京高等学校	昭和2年	文2丙	Molière, <i>Précieuses ridicules</i> Mérimé 短編集 Clédat, <i>Extraits des récits des auteurs du moyen âge</i>	
		文3甲	Clédat, <i>Extraits des récits des auteurs du moyen âge</i>	
	昭和13年	文2丙	須川彌作・中村義男編『小泉八雲文集』白水社 吉松駿二 G. Le Bon, <i>Choix d'essais</i> 三才社 ドオデ 内藤濯編『プチ・ショーズ』白水社	
		文2甲	N. スエット『巴里二千年史』白水社	
		文3丙	H. Bergson, <i>Le rire</i> Alcan 工藤肅編 A. France, <i>Evariste et Julie</i> 白水社 目黒三郎・竹村茂助・林和夫編『仏蘭西名家随想集』白水社	
		文3甲	小林竜雄編 A. de Vigny, <i>Laurette ou le cachet rouge</i> 大学書林 石川剛編 L. Halévy, <i>L'abbé Constantin</i> 郁文堂	
		理2丙	小林竜雄編 E. Zola, <i>L'attaque du moulin</i> 大学書林 内藤濯編 <i>Essais d'hier et d'aujourd'hui deuxième</i> 大学書林	
		理3丙	ゲーティエ 永井順編『仏蘭西精神』白水社 C. Bouglé, <i>Qu'est-ce que l'esprit français?</i> Rivière 市原豊太・永井順・小方庸正・岡田弘・折竹錫編『仏蘭西近代論文選 (1)』白水社	

(『旧制高等学校全書』とともに筆者が作成)

たは文学や思想などの人文書であることがわかる。フランス語履修者の多くが帝国大学法学部などで社会科学を専攻するためにフランス語を選択したであろうと考えられるにもかかわらず、高等学校の教育課程においては必ずしも社会科学のためのフランス語を学んでおらず、むしろヨーロッパの高級文化を伝える人文書を講読していた<sup>3</sup>。これらの書籍は旧制高等学校の教養主義の基盤となっている。

帝国大学の専門課程はフランス語の知識を要求することから、その準備教育のための高等学校においては相当に高いレベルまでフランス語を学習したと思われる。しかしながらフランス語は必ずしも専門的な学術分野に対応したものではなかった。これは単にフランス語教官の趣味の発現だけではなく、教育行政上の規定もある程度の影響力を持っていたと考えられる。新制大学の外国語教育については、初等・中等教育までの学習指導要領や学習指導要領解説といった教育行政の規定が存在しないが、旧制高等学校では「高等学校規程」(大正8年)、「高等学校高等科外国語教授要目」(昭和6年)などが公布され、カリキュラムを規定していた。なかでも「高等学校高等科外国語教授要目」は各学年での学習項目を簡潔ながらも詳細に記述しており、フランス語の講読教材を次のように規程している。

「教材ニ関シテハ主トシテ十七世紀以後ノ名家ノ著作ヲ採用シ仏国ノ文学、芸術、歴史、地理、制度、風俗、習慣、国民思想ノ変遷等ヲ知ラシメ以テ仏国ニ関スル一般的知識ヲ養スルモノトス」(旧制高等学校資料保存会編1981、p.163)

この要目を見る限り、講読教材はフランスの文化・文明に関するもので、必ずしも帝国大学の学部専門科目に直結する教材でないことがわかる。

ここまで旧制第三高等学校のフランス語教育のカリキュラムや教材などを検討したが、この教育体制は戦後の新制大学で実施されるフランス語教育と著しい相違点がある。まず旧制高等学校ではフランス語教育を実施していた学校が極めて少数であったが、新制大学では大学が新設され学生数が大幅に増加した。学習者の増加に反比例して、学習時間は大幅に削減された。旧制高等学校ではフランス語を第一外国語とする場合、3年間でおよそ800時間以上を、第二外国語の場合でもおよそ300時間以上をフランス語学習に配当してきたが、新制大学では2年間の授業で180時間と大幅に減少し、フランス文学科などを除いてフランス語を第一外国語として集中的に学習する制度は事実上消滅した。教育の民主化はフランス語教育に関する限り、教育制度の改善や充実に直結しなかったのである。次に新制大学のフランス語教育の実態を検討したい。

## 2. 新制京都大学創立期のフランス語教育

新制京都大学では昭和24(1949)年から第二外国語として週2コマ2年間の授業時間が配置され、第三高等学校の教官だった伊吹、生島ならびに本城が専任教官として教育にあたった。彼らは第三高等学校でのフランス語教育を念頭に置きながら新制大学での教育に従事したであろうが、『佛語初歩』はあまりに大部のため新制大学の授業には使用できなかったと思われる。では開学にあたりどのような教材を使用していたのだろうか。

そこで使用された可能性のある教材として第三高等学校と関連の深い、折竹錫(1950)『簡約フランス文典』を紹介したい。著者の折竹錫(1884-1950)は東京帝国大学仏文科を卒業後に、陸



軍士官学校教授を経て大正5（1916）年に第三高等学校教授に着任し、昭和16（1941）年に退官するまで3年間の在外研究期間を除き、第三高等学校において25年間にわたりフランス語教育に従事し、伊吹の第三高等学校での恩師にもあたる。第三高等学校への着任以前はフランス文学の研究論文や翻訳も行っていたが（萱沼1970）、第三高等学校に着任以降はいくつかの参考書を刊行するにとどまり、フランス語教育に専念した。初級フランス語教材の折竹（1950）『簡約ふらんす文典』は折竹文法の到達点のひとつである<sup>4</sup>。148ページから構成された本書は折竹の大作である『ふらんす新文典』（1956）<sup>5</sup>の簡易縮約版であり、1年間の学習で基本文法の概要を学ぶことができる。

この教材は簡潔ながらも文法事項の網羅的な解説を特徴とするもので、現在の教材といくつかの点で相違点がある。まず本書は課ごとに分割されておらず、文法項目の説明の後に23項の仏文和訳と和文仏訳の練習問題を順々に展開しているが、23課の体裁をとっていない。また重要な文法項目である動詞の活用など他の種類の練習問題は考慮されていない。文法用語についても「複過去」（複合過去）、「無人称動詞」（非人称動詞）といった具合にいくつかの用語の表現に相違が認められる。

折竹は「緒言」で本書の目的を次のように説明している。

「本書では、まず最低限度の基礎知識を骨格とし、それを比較的多くの練習材によって肉付けし、教室に於いても、あるいは自習に於いても、できる限りそれを研究者の身につくものとしたいと願った。」（折竹1950、p.i）

折竹によれば、この文法教科書は基本的な項目を示し、それを多くの練習問題を通じて理解し、習熟することを目指しており、そのため練習問題にも難しい課題、とりわけ和文仏訳を含んでいる。このような練習問題の作り方は新制京都大学のフランス語教官が作成した教材と共通点はあるものの、それだけでは折竹（1950）を新制京都大学開学時の教科書とするには不十分である。開学時のフランス語の授業については、後に教養部の教官となる山田稔（1930-）が以下の回想を残している。

「さて九月なかば、やっと授業が始まって最初にできた友だちが中川久定だった。クラスはちがうがフランス語の授業はいっしょだった。その年は文法は合併授業で伊吹武彦先生が担当、ただしふだんの半分の時間で初級を終らなければならぬので伊吹さんは説明だけで、練習問題やチームなどは後藤さんに任せた。講読は渡辺明正さんだった。」（山田1992、p.206）

この回想によれば、1949年は6月に入学試験を実施し、7月に入学式を行い、その後9月半ばから授業を始めるという異例の学年暦になっており、そのため半期で1年分の授業が行われたようで、週3回のフランス語の授業が行われ、そのうちの2回が文法にあてられ、1回は講読にあてられていた。山田の回想は既存の教材の存在を示唆するが、折竹は1949年夏に教科書の執筆を終え、教材は1950年9月15日に出版されたことから、1949年9月の時点で本書はまだ刊行されていない。ではどのような教科書が使用されていたのだろうか。他の高等学校などでも広く使用されていた内藤濯（1925）『基本仏蘭西語文典教科書』が有力な可能性かもしれない。これは1925年に初版が刊行され、それ以来、戦後にいたるまで版を重ねたベストセラーの第二外国語教材であるが、その間の事情については今後さらなる調査が必要である。

さて開学にあたっての京都大学のフランス語教官は、教授・伊吹、生島、助教授・本城、田中俊

一 (1904-92)、渡辺明正 (1912-2007) の5名であったが、伊吹は1950年に文学部に転出したため、分校でのフランス語教育には半年従事したにすぎない。分校に所属の教官はフランス語教室という名称の学内組織に所属し、この名称のもと1954年に『フランス語初歩』*Français pour les débutants* を刊行する。この編集にあたったのは田中、渡辺、本城に加えて、林憲一郎 (1913-2003)、後藤敏雄 (1915-92)、生田耕作 (1924-94) の6名であり、関西日仏学館教授 Jean-Pierre Hauchecorne の助言を得た。Hauchecorne は在神戸フランス総領事館総領事 Armand Hauchecorne (生没年不明) の息子で、昭和6 (1931) 年に来日し、2年間父親の勤務する領事館で働き、その後、昭和8 (1933) 年から5年間旧制静岡高等学校でフランス語の教授にあたり、その後、昭和13 (1938) 年に関西日仏学館教授に着任した。昭和16 (1941) 年から昭和22 (1947) 年までは第三高等学校の講師をも務めており、戦中戦後も京都にとどまった (宮本 1986, p. 186)。

『フランス語初歩』は現在刊行されている京大文法よりもひとまわり小さいB6版で、動詞の活用表を含めて85ページで構成されている。昭和29 (1954) 年2月に初版が刊行されるが、昭和31 (1956) 年には既に5刷を数え、さらに昭和32 (1957) 年には改訂版を出し、その改訂版もわずか1年で3刷を出しており、初版の刊行から4年間で8刷を数えている。『フランス語初歩』は1967年まで継続して刊行されていることから、既にその刊行部数は無視できないものであったと推測される。

『フランス語初歩』はどのような教材だったか。その方針は「まえがき」に明確に述べられている。

「本書は、主として大学において、はじめてフランス語を学ぼうとする人が、ほぼ学年の前期課程中に、文法の概要をつかみうるように、編まれたものである。短期間の講了を予定し、また学習者にすでに一外国語の素養あることを予想したため、本文は重要事項の説明のみに限り、その余は必要に応じて脚注を付ける程度にとどめた。なお足りないところは、練習問題の活用によって、補足されることを期待している。また、煩瑣な法則を羅列するよりも、種々の事項を総合しつつ、しだいに程度を高めることを目指し、練習問題の配列もまた、その主旨にしたがうように努めた。」(京都大学フランス語教室 1954, p. 3)

『フランス語初歩』は英語を既に学習した大学生が初めてフランス語文法を学ぶための文法訳読法に基づく教科書であり、文法説明は極めて簡略で、教師の解説がなければ文法項目を理解することは容易ではない。文法訳読法とは「文法・構文解析を駆使して、生徒の母語への翻訳を徹底的に実行すること」(小池 2008, p. 13) をめざす教授法であり、この教授法は文献などの講読のために実践されることが多い。文献の正確な読解には文法の理解が欠かせない。とはいえ、『フランス語初歩』は文法解説の多くを教師の講義にゆだね、教材のなかでの日本語による説明はわずかにとどまっている。また練習問題が補足的役割を果たすと記されているが、これは本文の文法項目に取りあげていない事項が練習問題に配置されていることを示している。練習問題は学習した文法事項を確認し、記憶するためではなく、新たな文法項目を学ぶことをも目的としている。このような練習問題の作り方は折竹 (1950) にも共通する。

『フランス語初歩』は「まえがき」の中で、本書は前期課程中の短期間での講了を予定していると明言しており、この文言は注目を引く。ここでの前期課程とは四月から十月初旬までの半期を指すとおもわれ、この限られた期間に文法の概要を学習するとの意図を示している。現在のおおかたの大学では一年間をかけて基礎文法を学び、それでも条件法や接続法まで進まないことがあるが、

接続法半過去までを半期で学習する『フランス語初歩』の想定する進度は現在の学習進度と比べるとはるかに速い。

『フランス語初歩』刊行の翌年1955年に京都大学フランス語教室は『フランス語初歩読本』*Lectures françaises pour les débutants*を刊行する。これは文法教材と平行して使用されていたであろう教材で、23課によって構成され、入門レベルの文章から始まり、ボードレールの詩 *L'albatros* を経て、1年間の最後はモーパッサンの *Clair de lune* にいたる、文学入門の趣を持つ教科書である。モーパッサンの小説は比較的易しいとはいえ、1年間の最後に読む読み物としては決して簡単ではなく、現在ならば2年目の読み物として通用しうる教材である。

このように授業時間数がおよそ半分程度、あるいは五分の一に削減されたにもかかわらず、新制大学では旧制高等学校のカリキュラムに匹敵するような教育目標を設定し、短期間に文法学習を終え、原典講読を行うことを目指していた。

戦後の外国語教育が戦前の外国語教育と大幅にカリキュラムを変更したにもかかわらず、なぜ教育目標を大きく変更しなかったのだろうか。戦後の混乱の中で外国語教育の目的論を議論する余裕がなかったためだろうか。旧制高等学校の教官が新制大学にそのまま配置換えになったこともその理由に挙げられるかもしれない。米軍の進駐により英語と接する機会は飛躍的に増加したであろうものの、ドイツ語やフランス語についての社会的需要が増加したわけではない。その点ではドイツ語やフランス語を話す機会が新たに発生したわけではない。またヨーロッパにおいてはコミュニケーションのための外国語教育という言語教育観は戦後直ちに生まれていない。コミュニケーションのための外国語教育はヨーロッパにおいて1960年代から欧州評議会の言語教育政策の中で議論が開始された。これらに加えて教育的観点を無視してはならない。新制大学は昭和24年の開設当初に外国語科目を補助科目と位置づけ専門科目を補助するとの位置づけであった。補助科目の名称はその後に変更となるが、専門科目の補助であるとする外国語の位置づけは変わらなかった。これは旧制高等学校と旧制帝国大学における外国語の位置づけを継承したものと考えられる。

外国語を専門科目の道具と見なす言語教育観は、日本における近代教育の草創期にさかのぼる。明治初期に日本語で専門科目を教えることが困難であった時代、外国人教官が外国語により行う教育を「正則教授法」と呼び、日本人教官が日本語で行う授業を「変則教授法」と呼んだ(久保田1976)。当時は日本語による教科書や参考書、さらには日本語の専門用語が存在しなかったことから、このような正則教授法が必要とされ、日本人教官も外国語による授業を行っていた。その後、次第に日本語への翻訳が進み、日本語による教育環境が改善されてゆくが、それでも高等教育での参考書は外国語によるものであり、専門用語も外国語をすべて置換することができなかった。旧制高等学校の外国語教育はこのような教育環境に対応したもので、戦後の京都大学における外国語教育の位置づけもこのような教育文化を継承している。

文部省令による教養部の開設された1959年に英語担当の山内(1959)は「大学における外国語の使命」を論ずるにあたり、京都大学では外国語教育は会話の養成を目指すものではないと断言し、以下のように続けている。

「日本の大学では、欧米の大学と異なって、先進欧米諸国の学問を取り入れるための、外国語読解力の涵養を至上命令として与えられていることをお忘れにならないでください。作る力、話す力はそのうえのことなのです。」(山内1959)



このようにもはや戦後ではないと語られた時代にあっても、学術の世界では西洋文明の移入が課題となっており、外国語教育は専門教育に「奉仕する」体制となっており、外国語教育それ自体の意義が論じられることはなかった。フランス語教官の田中俊一（1966）もその数年後に同じような趣旨の発言をしているが、それとともにフランス語教育の課題として英語教育に比べて時間数の少なさを強調している。

「これらの第二語学は（中略）わずか二年間に初歩から初めて相当の読解力と応用力を身につける至上命令を負わされているのである。」（田中俊一 1966）

ここで田中はわずか2年間の180時間のなかに旧制高等学校で実施された外国語教育と遜色のない成果を求めているように読み取れる。このような外国語教育観はおそらくは教員に内在化されながら1980年代まで続くものの、それと同時に新たな教授法の台頭とともにコミュニケーション能力の養成も視野に入るようになる。

### 3. 教養部時代のフランス語教育

昭和36（1961）年に宇治分校は廃止され、文部省令により教養部が設置されると、教養部は吉田南構内に移転する。この頃から京都大学のフランス語教育は量的にも質的にも発展を遂げ始める（京都大学教養部 1955～1992）。文学部は他学部と異なり、昭和39（1964）年より1回生向きフランス語を週3回6単位に増加した。外国人教師が新たに配置され、「外人担当フランス語会話」が開講され、従来の読解力の育成に特化した教育体制がコミュニケーション能力の育成にも関わるようになった。さらにこの年にLL教室が設置される。この教室の開設に尽力した大橋（1964）はその意義を以下のように力説している。

「あらゆる部門で国際交流が急速に活発化しつつある現在、シェークスピアもすらすらと読め、外人を向こうにまわして堂々と議論を戦わすことのできる語学力の必要性が痛感されている。」（大橋 1964）

昭和39（1964）年とは東京オリンピックが開催された年で、これは日本が国際社会の一員であることを国民にも知らしめ、国際観光客などの受入が始まるという点で、国際交流が開始される年である。そのような観点から外国語教育にも国際社会のなかで活躍する能力が語られるようになったのだろう。LL教室が設置され、1965年から1回生、2回生に向けて日本人教官によるフランス語実習のクラスが開設された。LL教室での教育は従来の文法教材では対応できないため、アメリカやフランス製の200万円から500万円といった非常に高価な視聴覚教材が導入された。フランス語教室では2回生向きに日本製の会話教材とアメリカ製のALM（Audio Lingual Materials, French）という視聴覚教材を、2回生向きにはフランス製のVoix et images de Franceおよび文学作品の録音教材を使用していたようである（大橋 1965）。

ALMとはアメリカの高校生を対象としたオーディオリンガルメソッドによるフランス語教材で、ドイツ語、イタリア語、ロシア語、スペイン語といった外国語にも展開するもので、説明はすべて英語で書かれている。この教材は構造言語学を背景にパターン練習を重視する会話教材で、学生向

き教科書、小テスト解答帳、練習録音カセット、ラボ用テープ、リスニングテストテープ、指導書から構成され、フランス語は四段階に展開している。京都大学で使用した教材はレベル1と2で、3、4を使用した形跡はない。

この一方で、*Voix et images de France* とは1960年からクロアチアやフランスの研究者が開発した「全体構造視聴覚法」にもとづく教材で、テープやスライドを使用する。この教材の使用にはこの教材を開発したCREDIF（フランス語教育普及研究センター）の実施する研修を受講する必要があるのだが、当時の教官がフランスなどで研修を受講していたのかは不明である。これはコミュニケーションの場面での話し言葉を統合的に学習する教材で、この教授法に従った教材はフランス語だけではなく、ドイツ語、英語、アラビア語などさまざまな言語学習に展開した。

LL教室の推進を担った大橋は「英語教育、特にアメリカのそれが科学主義的でパタンブラクティス中心であるのに対し、フランス式の教授法はダイレクト、メソッド（原文ママ）の伝統で、経験主義的であり、また言語をつねにその使用される状況との関連において捉えさせる努力をしている」（大橋1965）と評し、構造言語学の成果を活用するオーディオリンガルメソッドと全体構造視聴覚法の特徴をそれぞれ整理している。

これら既存の教材だけではなく、昭和39（1964）年には録音スタジオも開設され、独自教材の開発も可能となった。スタジオは従来の文学テキストなどの教材の録音に使用され、学生はLL教室で音声教材を視聴し、発音練習に使ったと考えられる。昭和40（1965）年にはLL教室が増設され、2教室60席となった。この頃のフランス語教室は教授3名（田中、渡辺、林）、助教授4名（後藤、生田、大橋、本城）、講師3名（Fressinet、山田、鈴木昭一郎）の10名から構成され、外人教師が3名という増員の時期もあったものの、この体制は教養部時代を通じてほぼ安定していた。

このように充実した教授陣のもとで『初等フランス語教本文法編』（以下『京大文法』と略記）が昭和42（1967）年に刊行された<sup>6</sup>。これは当時の日本人教官8名（後藤、大橋、林、生田、山本淳一、鈴木、山田、塩川徹也）の執筆したもので、『フランス語初歩』より判型がひとまわり大きく、100ページから構成されている。それにともない学習項目も充実し、付録では音節の区切りや発音と綴り字の詳細など初級文法ではあまり取り上げていないような事項にも言及している。

『京大文法』は『フランス語初歩』と同じく、間接的ながらも英語学習との対比を意識しており、それは緒言に現れている（京都大学フランス語教育1967）。「まず発音だが、綴字と発音との関係は単純で規則的であり、英語よりはるかにやさしい」と断言し、フランス語の発音が難しいとの社会的表象を否定し、「それがむつかしく感じられるとすれば、日々の小さな努力が足りないのか、我流の英語式発音を持ち込もうとする安易な態度のゆえである」と説き、学生の学習姿勢を戒め、フランス語学習にストイックな態度を求めている。またフランス語学習の初級では動詞の活用が難題のひとつであるが、これもまた「基礎的な学習と積み重ねていけば（中略）、フランス語はわかりやすく、明快な表現力を持つのだということを知るはずである」と訴え、継続的なフランス語学習を勧めている。学生には「この新しい言語にたいする鮮烈な心がまえと、それにとまなうべき努力」（p.3）を求め、禁欲的なまでの外国語学習を説いている。現在のフランス語教材と比較すると、『京大文法』はフランス社会や文化への関心はほとんど認められず、口頭コミュニケーション機能を養成する意図も認められない。このような禁欲的で克己の精神に満ちた学習観は最後の課に掲げられた作家ジイドの小説『狭き門』の一節に読み取ることができる。ちなみに、この練習問題は『フランス語初歩』の仏文和訳を引き継いだもので、『京大文法』が『フランス語初歩』の言語学習観を継承していることがわかる。

J'aimais l'étude du piano parce qu'il me semblait que je pouvais y progresser un peu chaque jour. C'est peut-être aussi le secret du plaisir que je prends à lire un livre en langue étrangère ; non certes que je préfère quelque langue que ce soit à la nôtre ou que ceux de nos écrivains que j'admire me paraissent le céder en rien aux étrangers - mais la légère difficulté dans la poursuite du sens et de l'émotion, l'inconsciente fierté peut-être de la vaincre et de la vaincre toujours mieux, ajoute au plaisir de l'esprit je ne sais quel contentement de l'âme, dont il me semble que je ne puis me passer.

(「私はピアノの練習が好きだった。毎日少しずつ進歩することができると思えたから。それは同時に外国語の本を読み取れる秘密の楽しみであるかもしれない。確かに私たちのものであれば、どんな言語でも好きであるというわけではないにしても、私が好きな作家のそれら(本)が外国人のものに劣っていないように思えるとしても——しかし感覚と感動の探求におけるわずかばかりの難しさ、それを克服し、さらに克服し続けてゆく、おそらくは自覚した自尊心が精神的快楽を倍加させるのであって、どのような魂の満足かはわからない。(しかし)それで済ますことはできないと思えるのである。)」(ジイド『狭き門』フランス語教室訳)

『京大文法』の編者は『狭き門』のなかでアリサの語る言語学習観に共感し、それを共有したのであろう。ちなみにジイドもピアノを嗜んでいたことから、これはまたジイドの外国語学習観であるかもしれない。外国語を学習し続けることは楽器の練習にも似て、日々の鍛錬を要求するもので、その訓練は容易ではないとはいえ、そこには日々の進歩を感じることができる。その進歩を経験することは精神の喜びとなり、魂を満たす。『京大文法』の編者は言語学習それ自体には精神的、道徳的な意義があることを認めているようだ。とは言い、このような文学性の高い例文を文法教科書の巻末に定めることにより、文法学習が文学作品の読解や鑑賞に接続するといった言語教育観を示しているといえよう。

この『京大文法』を使用する文学部のフランス語クラスは昭和48(1973)年より週4回8時間6単位に、それ以外のクラスは週3回6時間4単位に増加した。また昭和43(1968)年からは週1回2時間の第三外国語フランス語コースが設置され、学生の多言語学習環境が進展した。昭和44(1969)年にはさらにLL教室の増設が行われ、昭和49(1974)年にはALMと京大文法を組み合わせた6時間コース(週3回6単位)が開設され、文学部クラス、他学部クラス、2時間コース、実習クラスとフランス語教育は多様化を示すようになり、さらに集中コースは昭和53(1978)年には8時間コースへと発展し、現在にいたっている。また1976年に京都大学フランス語教室は『京大文法』に準拠する『新初等フランス語教本講読編』を刊行するが、これは日本人教官による初級講読が行われていた時期に主に使用されていたようである。このような一連の措置はフランス語教室のみが実施していたようで、10名ほどの専任教官の貢献によるところが大きい。この一方で、LL教室ではより実践的な外国語教育を推進していた。大橋(1988)はフランス語教育の体制が充実し、実践的な運用能力の養成が可能になった時代において、フランス語学習を国際交流の展望のもとに位置づける。

「外国語を学ぶよい方法は、留学生の友だちを持つことです。京大にはほぼ50カ国から自国の将来を担う優秀な学生、研究者が来ています。みな日本に深い関心を持つ人たちです。日本でも学生時代に海外旅行をする人が多くなりましたが、短期の旅行とは違った、深い国際理解

の機会が身近にあるのです。外国がこれほど身近になったのに、学生諸君は留学生とのつきあい方を知らぬ人が多いのではないのでしょうか。」(大橋 1988, p. 7)

1988 年は、1984 年のプラザ合意を受けて円高ドル安が進み、大学生の海外旅行が可能になった頃である<sup>7</sup>。そのなかで旅行会話にとどまらない、より深い知的なコミュニケーションの場面を留学生との交流に求めている。

このような学習時間の充実した教育体制は 1992 年に教養部が廃止されるまで続き、1982 年に京都大学フランス語教室は『京大文法』3 訂版を刊行する。1987 年には LL 教室の新設やスタジオの改修が行われ、また 1989 年に京都大学フランス語教室は *Vocabulaire fondamentale du français* (『フランス語基本語彙』) を刊行する。この副教材は単なる単語帳ではなく、「この本の使い方」はカリキュラムにおける本書の位置付けを明確に述べている。

「京都大学におけるフランス語教育は特別なクラスを除き、文科系・理科系を問わずすべての初級クラスが、文法・講読・外人実習という 3 つの柱から構成されている。(中略) この「基本語彙集」は、日本人教官が担当する「講読」とフランス人教官が行う「外人実習」とを総合的に活性化し、諸君のフランス語の運用能力を有機的に高めようとしている。」(京都大学フランス語教室 1989)

この副教材は『京大文法』のクラスに向けられていたものの、この頃になると、フランス語学習は専門課程で専門書を読むための科目に従属するものではなく、フランス語コミュニケーション能力の育成を総合的に目指していることがわかる。

#### 4. 教養部以降のフランス語教育の展開

平成 4 (1992) 年に総合人間学部が設立され、平成 5 (1993) 年に教養部が廃止されると、日本人教員の担当していた講読クラスは廃止され、他の言語と同じく、フランス語も週 2 回のカリキュラムとなった。これにより教養部に所属していたフランス語教員の教養教育の負担は若干軽減されたものの、新たに総合人間学部および大学院の授業を担当するようになり、授業負担は著しく高まった。そしてコンピューターの発展とともにフランス語教育にも新たな潮流が到来する。この頃に LL 教室に配置されていた助手の三枝裕美 (中国語の専門) が CALL (Computer Assisted Language Learning) を専門としていたことから、三枝は新任の大木充にフランス語の CALL 教材の作成を提案し、この提案が大木 (1996) 『CD フランス語文法』 *Grammaire active du français* の刊行に結びついた。1996 年には総合情報メディアセンターが学内に設置され CALL 教室が開設され、次第にフランス語の CALL 教材の開発が本格化していった。この時に開発された『CD フランス語文法』は現在も使用されている『グラメール・アクティヴー文法で複言語・複文化』(2020) の原型である。1998 年の時点では CD-ROM を使用していたが、2010 年からはネット環境の整備によりオープン・リソースとして広く使用されている。

CALL フランス語文法によるフランス語教育は、教科書、ネット教材、確認練習プリント、まとめテスト、ポートフォリオ、確認練習チェックリストから構成されている。ネット教材は教科書の例文、発音練習に加えて文法項目の説明とそれに対応する練習問題から構成されており、フランス



語の音声を聞くことだけではなく、練習問題に解答を入力し、自己採点を行うことができるよう編集されている。授業では教師が文法項目の解説や学習のポイントの説明を行い、学習者はそれにもとづき、みずから練習問題を行う。とはいえ、授業ではすべての文法項目を取り扱うわけではなく、文法の発展事項は学習者が教室外で自律的に学習することができるように設計されている。ネット教材の利点は何度もくり返し入力し練習を行うことができ、間違った場合でも簡単に修正ができる点にある。その反面、鉛筆などの筆記用具を用いて解答するものではないため、「書いて覚える」という学習スタイルとは根本的に異なる。そこでこの学習スタイルを補完するために、各課それぞれに確認練習プリントを準備し、学生がサイトから自由にダウンロードできるように配慮した。学生はこのプリントをダウンロードして筆記用具を用いて学習した後に、それぞれの課の最後に行われるまとめテストにのぞむ。まとめテストは主に確認練習プリントから出題されるため、教室外学習の成果を確認することにもつながる。授業外でしっかり復習を行っているならば、まとめテストも相応の成績がとれるよう設計されている。まとめテストは授業時間内に行われ、教師の解説のもとに自己採点を行い、その点数をポートフォリオのグラフに記入する。各回の成績の推移を学習者が可視化できるようグラフをポートフォリオに配備したのである。ポートフォリオはまとめテストのふり返し、点数の可視化に加えて、フランス語学習そのものをふり返るページが設けられており、学習者は自分の学習方略などをふり返ることができる (Ohki 2014)。

また、まとめテストをふり返るシートもポートフォリオに掲載され、どこを間違えたのか、なぜ間違えたのかを学習者がふり返り、次回の学習に役立つことのできるよう設計されている。これらはいずれも個人が自由に記述するスタイルをとっており、記述内容ではなく、記述への取り組みそれ自体を評価の対象と想定し、学習プロセスの評価を試みている。フランス語文法の学習を文法事項の学習だけにとどめるのではなく、学習のふり返しを通じて「外国語学習とは何か」を省察することのできるよう設計されているのである。

このように CALL フランス語文法は文法学習を教室内だけにとどめることなく、授業外での自律的学習を可能にする装置や学習の工夫を備えている。さらに各課に設けられたコラムでは、フランス語と日本語、英語を比較したり、フランス文化と日本文化を比較し、限られた範囲であるが、複言語・複文化教育の導入を試みている。これらに加えて、2010年版の CALL フランス語文法からは「言語への目覚め活動」を統合した。

言語への目覚め活動とは、個別言語の学習ではなく、学習者の関心をさまざまな言語の機能や構造に向け、言語文化の多様性を体験し、異なるものに対する寛容を養う教授法であり、1980年代以降にヨーロッパで開発された (大山 2016)。『グラメール・アクティヴー文法で複言語・複文化』(2020) では各課に言語への目覚めをクイズ形式で配置し、学習者がフランス語学習を契機として、言語文化の多様性へ開かれるような工夫が凝らされている。なお、これはネット教材には展開しておらず、あくまでも紙媒体の教科書に限られているもので、また学習者の評価の対象にはなっていない。

CALL 教材の導入以降、文系学部では従来の『京大文法』を、理学部を除く理系学部では CALL フランス語文法を使用している。2001年まではすべての学部で初修外国語の必修単位が8単位であったため、1年目に基礎文法を学習し、2年目に中級の講読などを履修する形態をとっていた。ところが、2001年から工学部の初修外国語の必修単位数が半減し4単位となったため、1年間の履修だけで卒業要件を満たすこととなった。そのために2年目の中級の授業を受講する学生が激減した。必修単位を8単位とする文系学部の学生は2年目の授業を履修するものの、理系の学生

はほぼ履修をしなくなった。2年目に講読などの授業を行うことを前提とする場合、一年目に基礎文法の大半を学習する必要がある、文法項目の配置や進度も講読をめざすものとなり、『京大文法』はこのような学習体制に対応している。ところが、2年目の授業がないことは、習得すべき文法項目の制約がなくなることを意味するため、文法項目を軽減しても何ら不都合はない。そのために、理系学部の学生が履修するCALL教材の文法の進度は京大文法に較べると、いくらか穏やかであり、また授業で取り扱う文法項目もより少ない。学習者にとってより負担も少ないものとなっている。

## 結論

本稿は新制京都大学におけるフランス語教育の展開を経時的に検証し、旧制高等学校の教育文化を継承するフランス語教育が専門科目の補助的な役割を果たした時代から始まり、社会環境や教授法の発展に対応して変化を遂げてきたことを明らかにした。2004年の国立大学の独立法人化以降、国立大学は効率化係数を根拠として予算の削減と集中が唱えられ、これは外国語教育においては教員数の削減として如実に反映されるようになった。また必修単位数の減少も外国語教育の存立にとって打撃となっている。

ではこれまでの歴史から何を学ぶことができるのだろうか。まず教育目標が時代に従って変化していることに注目したい。学術目的一辺倒の時代から現代は次第にコミュニケーションなどさまざまな教育目的へと変化する時代となってきている。この一方で、専門課程との関連は単なる補助科目や準備教育ではなくなっている。この教育観は旧制高等学校のフランス語教育にさかのぼる。たとえ専門課程でフランス語の能力が必要になるからといえども、フランス語教育の実践は必ずしも専門課程の学習を先取りし、その準備を行うものではなく、フランス文明を学ぶことを目指していた。これは教員が広い意味でフランス文明の専門家であり、学生が専門課程で学ぶ分野の専門家でないためでもあるとともに、「高等学校高等科外国語教授要目」などが教養を重視するカリキュラムを編成しているためでもある。

なお本稿では旧制第三高等学校のフランス語教育について、その全体ならびに第三高等学校教授折竹錫の貢献を十分に論ずることができなかったが、これは別の機会に譲りたい。

## 注

- 1 岩永（2017）は1897年の京都大学の創立から現在に到るまでフランス研究に関与する教員をほぼ網羅的に調査した論文で、フランス語教育に言及するものではないが、フランス語教員の動向を把握しており、本稿の執筆にあたり大いに参考になった。
- 2 旧制高等学校の授業時間について具体的な時間割が発見されていないため、卒業生の回想によらざるを得ないが、それによると1回の授業時間は50分とされている（田中貞夫2005、p.103）。
- 3 ここでの「高級文化」とは、ある社会のなかでの支配層の文化を指す。支配層は自己の所有する文化を最良で、ただひとつの価値あるものとして押しつけ、それにより卓越化を図る（Coq, 2003, p. 63）。
- 4 筆者は本書を古書店で購入したところ、以前の所有者が大阪市立大学法文学部文学科の学生で、1950年よりフランス語のクラスで使用していたことが確認できた。
- 5 『フランス新文典』は折竹が生涯をかけて改訂を重ねた参考書で、初版は1916年の『詳細仏蘭西文典』にさかのぼるもので、折竹の没後に増補改訂版（1956）が白水社より刊行された。
- 6 『京大文法』はその後、1973年、1982年、1993年、2008年とおおよそ新任教員の着任とともに改訂を進め、教材に対する理解と愛着を深める方針が貫かれた。

- 7 2020年の日本政府観光局の統計によれば、1988年の海外旅行者数は842万人あまりで、プラザ合意以前の1983年の海外旅行者数(423万人)と比べると、ほぼ倍増しており、プラザ合意が海外旅行の大衆化に拍車をかけたことがわかる。

### 参考文献(日本語)

- 第三高等学校(1927～1941)『第三高等学校一覧』京都：第三高等学校  
 暁星学校編纂(1896)『佛語初歩』東京：暁星学校, 406 p.  
 岩永大気(2017)「京都大学におけるフランス研究の歴史」『仏文研究』, n. 48.  
 萱沼竹子(1970)「折竹蓼峯」, 所収 折竹錫(1970)『折竹錫先生遺稿集』東京：三高同窓会関東支部, 356 p.  
 旧制高等学校資料保存会編(1985)『旧制高等学校全書第3巻教育編』東京：旧制高等学校資料保存会刊行部, 711 p.  
 京都大学フランス語教室(1954)『フランス語初歩』東京：白水社, 85 p.  
 京都大学フランス語教室(1955)『フランス語初歩読本』東京：白水社, 48 p.  
 京都大学フランス語教室(1967)『初等フランス語教本文法編』東京：白水社, 100 p.  
 京都大学フランス語教室(1976)『初等フランス語教本講読編』東京：白水社, 74 p.  
 京都大学フランス語教室(1989) *Vocabulaire fondamentale du français* (『フランス語基本語彙』) 京都：京都大学フランス語教室 99 p.  
 京都大学百年史編集委員会編(1998)『京都大学百年史総説編』京都：京都大学後援会, 1349 p.  
 京都大学(1952)『履修解説と分校案内』  
 京都大学分校(1954)『授業科目の履修および分校案内』(学生便覧付録)  
 京都大学教養部(1955～1992)『履修指導と教養部案内』  
 久保田正三(1976)「高等学校における外国語教育の位置」『旧制高等学校史研究』n. 7.  
 小池生夫編集主幹(2008)『応用言語学事典』東京：研究社, 1012 p.  
 沢柳政太郎(1979 [1924])『我国の教育』, 成城学園沢柳政太郎全集刊行会編『沢柳政太郎全集』第8巻, 東京：国土社  
 杉山直治郎(1934)「我国外国語教育の根本問題」『日仏文化』新5輯  
 宮本エイ子(1986), 『京都ふらんす事始め』東京：駿河台出版社, 297 p.  
 内藤濯(1925)『基本仏蘭西語文典教科書』東京：白水社 51 + 20 p.  
 中村能盛(2015)『追憶の暁星』秋田：くまがいの書房, 140 p.  
 西山教行(2017)「伝統から刷新に向かうフランス語教育」*WINPEC Working Paper Series*, No. J1605  
 西山教行(2017)「京都大学における文法教育の起源とその特徴」, *Revue japonaise de didactique du français*, vol. 11, n.1, *Etudes didactiques*, pp. 65–81.  
 日本政府観光局「年別訪日外客数, 出国日本人数の推移」[https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/marketingdata\\_outbound.pdf](https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/marketingdata_outbound.pdf)  
 大木充(1996)『CD フランス語文法』東京：朝日出版社, 49 p.  
 大木充(2008)「授業紹介4 フランス語 I 文法 (CALL)」『教養教育通信』(京都大学)  
 大木充, ジャック・ラローズ, マリー・クリスチヌ・バルトネ(2004), 『新CD フランス語文法』東京：朝日出版社, 100 p.  
 大木充, 西山教行, グラヅィアニ, ジャン＝フランソワ(2010)『グラメール・アクティヴー文法で複言語・複文化』東京：朝日出版社, 92 p.  
 大木充, 西山教行, グラヅィアニ, ジャン＝フランソワ(2013)『改訂版グラメール・アクティヴー文法で複言語・複文化』東京：朝日出版社, 104 p.  
 大木充, 西山教行, グラヅィアニ, ジャン＝フランソワ(2020)『三訂版グラメール・アクティヴー文法で複言語・複文化』東京：朝日出版社, 107 p.

- 大橋保夫 (1964) 「ランゲージ・ラボラトリー (L.L)」『京大教養部報』 n. 2.  
大橋保夫 (1965) 「語学実習のその後」『京大教養部報』 n. 4.  
大橋保夫 (1988) 「京大で学べる外国語」『京大教養部報』 n. 171.  
大山万容 (2016) 『言語への目覚め活動—複言語主義に基づく教授法』 東京：くろしお出版, 176 p.  
折竹錫 (1950) 『簡約ふらんす文典』 大阪：創元社, 148 p.  
折竹錫 (1954) 『フランス新文典増補改訂版』 東京：白水社, 668 p.  
田中俊一 (1966) 「語学についての覚え書き」『京大教養部報』 n. 9.  
田中貞夫 (2005) 『旧制高等学校フランス語教育史』 松本：旧制高等学校記念館, 145 p.  
山内邦臣 (1959) 「大学における外国語の使命」『京大教養部報』 n. 1.

(欧文)

- Cuq, Jean-Pierre [sous la direction] (2003), *Dictionnaire de didactique du français langue étrangère et seconde*, Paris : CLE international, 303 p.  
Guberina Petar, Rivenc Paul (1966), *Voix et Images de France. Cours audio-visuel de français, premier degré*, Paris : Credif et Didier, 168 p.  
Modern Language Materials Development Center (1961), *ALM French Level One*, New York : Harcourt, Brace & World, Inc., 2nd edition, 349 p.  
OHKI Mitsuru (2014), 《 Motiver par l'éducation au plurilinguisme : développement d' une didactique appropriée à l' apprentissage du français au Japon 》, *Didactique plurilingue et pluriculturelle : l' acteur en contexte mondialisé*, Paris : Editions des archives contemporaines.



## **Changes and Challenges in the Teaching of French at Kyoto University: From 1949 to the 21st Century**

Noriyuki Nishiyama\*

### **Abstract**

This article examines the practice of teaching French at Kyoto University from 1949 to the 21st century, and identifies the values of this evolution. Shortly after the opening of Kyoto University under the new regime, French teachers began to develop their own teaching materials, continuing their efforts to this day with the *Manuel pratique de langue française*, a grammar book. In parallel to this textbook, which inherited the educational culture of the higher secondary school of the old regime, practical French teaching based on audio-visual methodology was carried out in LL classes from the 1960s onwards, which led to the development of the CALL French grammar in the 1990s.

**Keywords:** French language education, textbooks, curriculum, history of education, Kyoto University

---

\* Institute for Liberal Arts and Sciences, Kyoto University

